



TITLE:

1939年12月の天象

AUTHOR(S):

---

CITATION:

1939年12月の天象. 天界 1939, 20(223): 208-206

ISSUE DATE:

1939-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167886>

RIGHT:

**太陽** 月初め早々“蛇遺ひ”星座に入り、順次に黄道上を東へ進んでゐる。19日には“射手座”に侵入し、23日午前3時06分には黄経  $270^\circ$ 、即ち“磨羯宮”に入る。即ち冬至である。一帯に赤緯が低いので、地球上、北半球では晝間が最も短かく、夜間が最も

1939年

## 12月の天象

長い。南半球では其の反対に、晝が長く、夜が短い。尤も、しかし、気候は相當に遅れるので、北半球でも気温は最低ではなく、又、南半球でも決して最高気温ではない。——太陽面上に見える黒點は、やはり、まだ々々非常に夥しくて、毎日毎刻、大小いろいろのものが現はれたり、かくれたりする。之れが、地上の電磁気現象に感應したり、オロロラを起したり、黄道光や其の他一般の宇宙現象に關連することが多いのだから、油斷はならない。

**月** 4日の早曉5時10分に下弦となり、“獅子座”の南隣“六分儀”の東南隅に於いて輝く。11日の朝6時45分に新月で、此の日が、舊曆で言へば十一月朔に當る。19日朝6時4分に上弦で、“魚”座の、春分點の西に位置する。26日の夕暮れ20時28分に満月で、“オリオン座”の北部、“双子座”との境界線上にある。歳を超えて一月2日13時56分に再び下弦。

**水星** 十一月末に内合した後、曉の星となり、17日には太陽からの極大離角  $21^\circ 25'$  となるから、朝早くは“蝸座” $\beta$  星附近にあつて觀察し易い。光度0等。

**金星** ひき續き宵の明星で、毎日、日没後1~2時間、西の空に輝く。光度は-3.4等、視直徑  $11''$ 。

**火星** 日没後の西南空に赤銅色の光を放つ。光度は0等級であるが、地球からの距離は1單位以上となり、視直徑も  $9''$  以下に降つて了つた。觀測の時期ではない。

**木星** “魚座”の春分點附近を緩やかに順行中。研究的にも、通俗的にも觀察には便利である。衛星の眺めも良い。光度-2等。視直徑  $40''$  内外。

**土星** “魚座”の東部を緩やかに逆行中、年末30日には一時停留し、其の後は順行に移る。光度0等級、視直徑  $17''$ 。輪は、外輪の長徑が  $43''$ 、短徑  $10''$ 。50倍以上の望遠鏡で、良い眺めである。

**天王星** “羊座” $\delta$  星の南、53番星附近を逆行中。光度6等。肉眼では觀察困難。

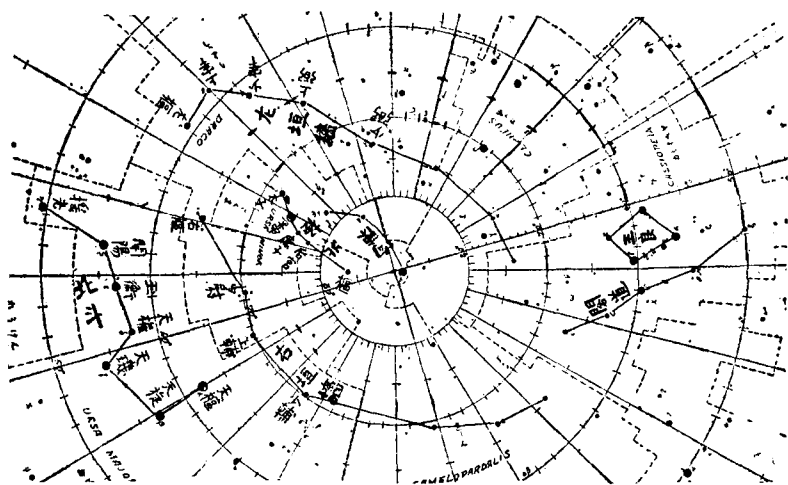
**海王星** “乙女座” $\beta$  星の附近を緩やかに順行中、月末30日には一時停留となり、後、逆行す。光度7等。肉眼では見えない。

**冥王星** “蟹座” $\iota$  星の南を逆行中。最大級の望遠鏡でなければ見えない。

**恒星の空** 秋の空の象徴であつた“ベガソス”の正方形も、稍や西へ傾き、“白

鳥”，“水瓶”，“南魚”なども皆，低く西の地平線に見えてゐるのみ。其の代り，子午線上には“カシオペヤ”，“アンドロメダ”，“三角”，“羊”，“鯨”等の諸星座が輝やき，尙ほ，東天からは“牛”，“オリオン”，“駁者”ペルセウス，“双子”などの冬の星々が現はれ始める。勿論，夜が更けて来ると，此等の美星たちが，益々高く天空に伸して，冬の真盛りの如き姿を見せるし，又，夜明け前になると，“獅子”，“乙女”の如き時節外れの星々も現はれて来る。寒い頃ではあるが，星を楽しむ者には，なか々々見ごたえのある空である。双眼鏡で“プレヤデス”星群や，オリオン”の大星霧の附近に群がる星々を見るのも良い。口径5 糎乃至10糎の小望遠鏡によると，“カシオペヤ座”の $\eta$  星や， $\sigma$  星，“アンドロメダ”の $\gamma$  星，“羊座”の $\gamma$  星，“三角座”の $\epsilon$  星など，皆美しい二重星である。又，“アンドロメダ座”の大渦巻き星霧，“三角座”の星霧 M 33，“牛座”の M 1 即ち俗に言ふ“蟹形星霧”なども是非見るべきものである。

‘紫微垣’の星々 支那では，昔から北極附近の星空を“紫微垣”と稱し，こゝを天の王宮のある場所として，全天の諸星を率ゐる位に定め，北極の星々を中心として，右垣牆と左垣牆との二列の星々によつて之れを圍んだ形に見立てた。尙ほ此の紫微垣の最外部には，一方に“北斗”七星があり，之れに對して，西洋のカシオペヤ星座あたりが“王良”，“閼道”の二つの星宿となつてゐる。西洋の小熊星座が支那では“勾陳”と“北極”と二つの星宿に分たれ，殊に北極宿の星々が帝，太子，后宮，庶子等の嚴かめしい名で呼ばれてゐるのは，歳差による北極移動の事實を考へ合はせると，興味深いことである。



支那星座の圖 (1)

## 十二月の天體曆表

日付	七曜	正午月齡	干支	天 界 現 象 (日本標準時)	ユリウス日 (21時)
1	金	19.8	壬申	アルゴルの極小光度(16時)	2429599.0
2	土	20.8	癸酉	蟹 $\kappa$ 星の掩蔽(6時) 白鳥 R 星極大	600.0
3	日	21.8	甲戌	木星極南 月が近地點通過	601.0
4	月	22.8	乙亥	{下弦 アルゴルの極小光度(13時) 鯨 T 極大	602.0
5	火	23.8	丙子	海王星と月と會合(海 $4^{\circ}14'$ 北)	603.0
6	水	24.8	丁丑	カシオペア W 星極大	604.0
7	木	25.8	戊寅	アルゴルの極小光度(10時)蛇遺ひUS極大	605.0
8	金	26.8	己卯	“大雪” 水星停留 乙女 R 極大	606.0
9	土	27.8	庚辰	水星と月と會合(水 $13'$ 北) 麒麟 T 星極大	607.0
10	日	28.8	辛巳	アルゴルの極小光度(7時)	608.0
11	月	0.2	壬午	新月(舊11月朔) 水星極北	609.0
12	火	1.2	癸未	ヘルクレス座 W 星極大	610.0
13	水	2.2	甲申	{アルゴルの極小光度(4時) 金と月と合(金 $6^{\circ}$ 南)	611.0
14	木	3.2	乙酉		612.0
15	金	4.2	丙戌	山羊 V 星極大	613.0
16	土	5.2	丁亥	アルゴルの極小光度(1時) 乙女 S 極大	614.0
17	日	6.2	戊子	水星の西方極大離角( $21^{\circ}$ )	615.0
18	月	7.2	己丑	アルゴル極小(21時) 海王星矩象 火と月と合(火 $4^{\circ}$ 南) 月が遠地點	616.0
19	火	8.2	庚寅	上弦 木星と月と會合(木 $4^{\circ}$ 南)	617.0
20	水	9.2	辛卯	水瓶 R 星極大光度 セフェ Z 星極大	618.0
21	木	10.2	壬辰	{アルゴルの極小光度(18時) 土と月と合(土 $3^{\circ}$ 南)	619.0
22	金	11.2	癸巳	山羊 U 星極大 山猫 T 星極大	620.0
23	土	12.2	甲午	{“冬至” 太陽磨羯宮に入る(3時06分) 木星矩象	621.0
24	日	13.2	乙未	{アルゴルの極小光度(15時) 牛 $\delta$ 星掩蔽(20時)	622.0
25	月	14.2	丙申	{大正天皇祭 クリスマス ニュートン祭 牛 H' 119番星蔽掩(1時) 孔雀 R 極大	623.0
26	火	15.2	丁酉	満月 アンドロメ座 R 星極大	624.0
27	水	16.2	戊戌	アルゴルの極小光度(12時)	625.0
28	木	17.2	己亥	双子68番星掩蔽(2時)	626.0
29	金	18.2	庚子	土星停留 海王星停留 月が近地點	627.0
30	土	19.2	辛丑	{金星極南 アルゴル極小(9時) 海王星の東方停留 土星の西方停留	628.0
31	日	20.2	壬寅	獅子 B 155番星蔽掩(1時)	629.0